



スマートフォンが置いてあるだけでも注意を損なう効果を検証

研究成果のポイント

- ・ 携帯端末をそばに置いておくことが注意に及ぼす影響を実証的に検証。
- ・ 不使用でも携帯電話がそばにあるときは、本来向けるべき場所への注意が阻害された。
- ・ 普段は携帯電話を使わない人ほどこの影響が強い傾向にあった。

研究成果の概要

本研究は、携帯電話が単に置いてあることが注意に及ぼす影響を実証的に調べたものです。携帯電話やスマートフォンを使いながら他のことをすると、見落としや判断に遅れが出ることはよく知られていますが、使用せずにそばに置いているとき、注意の広がりを与える影響は不明でした。北海道大学大学院文学研究科の河原純一郎特任准教授は、中京大学の伊藤資浩氏（北海道大学大学院文学研究科特別研究生）と共同で、こうした携帯端末そのものが注意に及ぼす効果を測定しました。その結果、画面を消した他人の携帯電話であっても、ただそばに置いてあるだけで注意が損なわれることがわかりました。特に、普段は携帯電話を使わない人ほどこの影響が強い傾向にありました。

こうした効果が起こるのは、2つの原因が考えられます。一つは携帯電話が置いてあるだけでも注意を自動的に引きつけること、もう一つはそのような注意の引きつけと、それを無視しようとする働きに個人差があることです。これらの2つの要因が合わさって、携帯端末が置いてあるだけで注意の広がりに偏りが生じ、身の回りに注意を向ける行動が阻害されると考えられます。

論文発表の概要

研究論文名：Effect of the Presence of a Mobile Phone during a Spatial Visual Search.（携帯電話が単に置いてあることが空間的視覚探索に及ぼす影響）

著者：伊藤資浩（中京大学・北海道大学大学院文学研究科）、河原純一郎（北海道大学大学院文学研究科）

公表雑誌：Japanese Psychological Research, Vol. 59, No. 2（日本心理学会の国際誌）

公表日：日本時間 2016年12月26日（月）（オンライン公開）

研究成果の概要

(背景)

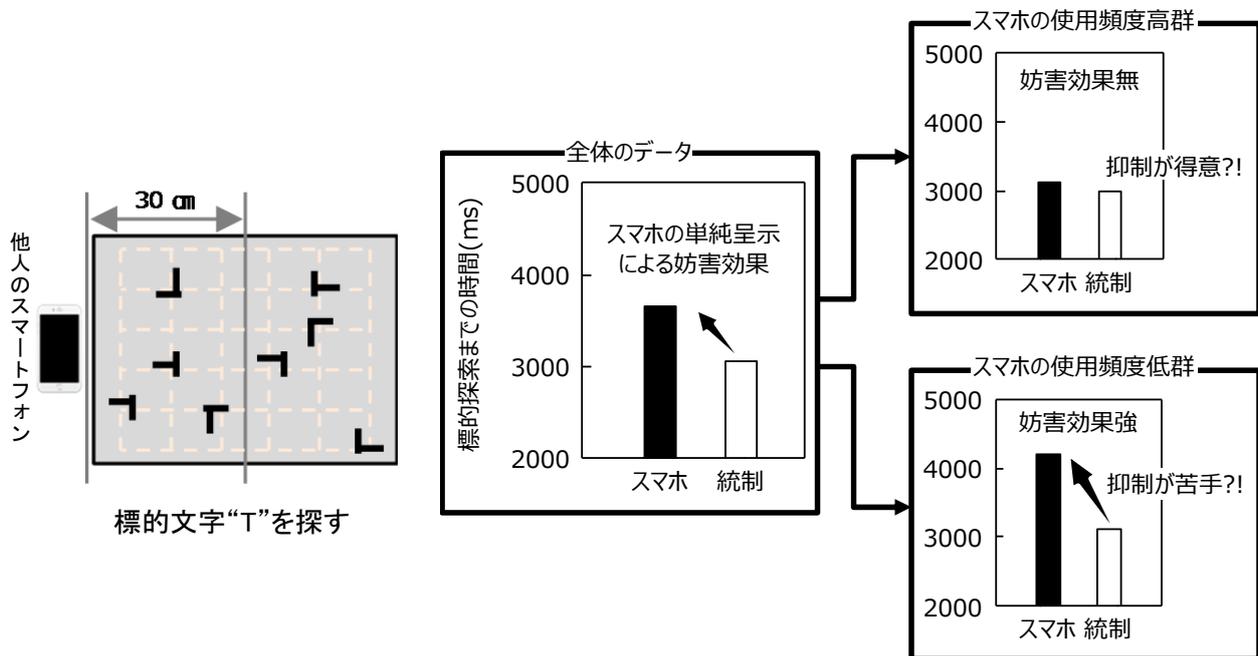
「歩きスマホは危険です」と言われているように、操作に夢中になっていることで他の物事へ注意が行き届かず、事故が多発している問題があります。しかし、日常生活において、メールの返事が来ないか、SNSの通知が来ないかなど、使用せずとも携帯端末に注意を向けていることはないでしょうか。本研究では、実際に使用せずとも、単に携帯端末が置いてあることで、注意が損なわれるかどうかを検証しました。また、この効果と利用頻度の関係を検討しました。

(研究手法)

実験参加者をスマホ条件と統制条件の2グループにランダムに割り振り、検証しました。スマホ条件では、PCモニタの脇に実験者のスマホを置き、実験参加者にモニタ上の多数の文字の中から標的文字を探そう求め、探索にかかった時間を計測しました。統制条件では、スマホの代わりに同サイズのメモ帳を置き、同様の実験を行いました。その後、全参加者に対して普段のスマホ使用頻度や愛着について、質問しました。

(研究成果)

標的を探すまでに要した時間は、統制条件よりスマホ条件で長くなりました。すなわち、単にスマホが置いてあるだけで自動的に注意が向いてしまい、課題成績が悪くなったと考えられます。しかし、この効果は使用頻度が低い人に強く起こり、スマホを普段からよく使用する人はかえってスマホの置かれた側の標的に気づきやすいこともわかりました。すなわち、スマホの存在を無視したり注意する機能に個人差があることがわかりました。



お問い合わせ先

所属・職・氏名：北海道大学大学院文学研究科 特任准教授 河原 純一郎 (かわはら じゅんいちろう)

TEL：011-706-4154 E-mail：jkawa@let.hokudai.ac.jp

ホームページ：http://www.let.hokudai.ac.jp/staff/4-1-09

http://cogpsy.let.hokudai.ac.jp/~f209/index.html